

日野弘資問答

三

特別  
4  
980





目野殿之詔抄

左













しつとて下不遠亦出茶よた遠海うひをり花の下左  
詠もあし海女もろま書の山風動彩よた前ありとも  
きこふ海女詠も一海女とて言首波成入道とて言ふた  
詠とて物の別よ有やとて言ふ事とて言ふはうけ成とて  
詠とて有とて言ふはうけ成とて言ふ事とて言ふはうけ成とて  
詠とて有とて言ふはうけ成とて言ふ事とて言ふはうけ成とて  
詠とて有とて言ふはうけ成とて言ふ事とて言ふはうけ成とて

○ 春水有作定 其の歌を秋とて言ふ言風の言に言つぐ  
山川のありつぐの河石底成中け歌とて言ふ事  
ありけり定事とて言ふ言首波成入道とて言ふ事  
てぬまもあしつぐの河石底成中け歌とて言ふ事  
の言に言ふ言首波成入道とて言ふ事  
けりけり言首波成入道とて言ふ事  
今も言首波成入道とて言ふ事

表草鏡事 文一の歌とて言ふ言風の言に言つぐ  
ありけり言首波成入道とて言ふ事  
ありけり言首波成入道とて言ふ事  
ありけり言首波成入道とて言ふ事  
ありけり言首波成入道とて言ふ事  
ありけり言首波成入道とて言ふ事  
ありけり言首波成入道とて言ふ事  
ありけり言首波成入道とて言ふ事  
ありけり言首波成入道とて言ふ事

○ 中絶形 けり言首波成入道とて言ふ事  
ありけり言首波成入道とて言ふ事  
ありけり言首波成入道とて言ふ事  
ありけり言首波成入道とて言ふ事  
ありけり言首波成入道とて言ふ事  
ありけり言首波成入道とて言ふ事  
ありけり言首波成入道とて言ふ事  
ありけり言首波成入道とて言ふ事  
ありけり言首波成入道とて言ふ事

表草鏡















よ通承をけれ志望の山祇右方や云々  
よううううう判云々の戸にも右方人か状断  
とまききとやと有るはるふの親必あ  
はるにたるる有然して二有る  
わしじふ人の名とてぬるは秋の  
日良又 集るうとあわりの標の  
屋よと有るは外古き秋よ多  
石之のやうよとあわるとい  
の屋にちあわるとて有る  
別解陣状の判現よすにの  
きく秋ともよ多とあわ  
るは前いやとて後向ふ  
撰集よと有る 是るまに  
屋いとうとてさうら  
たむら

人の名もあわると秋の志望  
よ中納言兼忠々々の中  
よとあわるとあわるとあ  
年集流撰集よと有る  
あうりゆうとてさうら  
をぬく人ぬとてさうら  
飛也抄流とてさうら  
よ有るよとてさうら  
ほれとてさうら  
よ有るよとてさうら  
よ有るよとてさうら  
よ有るよとてさうら

あふとれ

三たあ

二











不お意なる初たりぬるもの初是今の終め判録を  
りぬ

○ん地して

志賀山誠右衛門信長 其い多々書寫とむるん地  
して花とそん信長志賀の山誠右衛門判云これの書に依  
あはすの心のはこく 那治よなれぬか一と書  
んちしての朝いさうく 之は信長書寫とむるん地  
く花とそいふはれとさるはち中と花の書に依  
事一とひとてすの神那治のやうはぬと書  
しとむるの事 毎交すむる一あはすん地  
て三ノ部すはあふまふ

○小ほを以はちくくすたとそ

志賀山誠右衛門信長 其い多々書寫とむるん地  
まよ一花と教ふとあはすの山道判云志賀の山誠と書  
ぬるの山道とさるはあはすのまよと書はれぬか  
す

あるは事海法言く小但先達の罪人書以たさるは  
かといちるいさうの初南村の前は用ひよくす者  
は

○あつとが

魁九事録 山吹の花の書に依りぬまはたさるは  
よりのしと也判云花分すよりの心と書はれぬか  
ゆまははと花悟せさるまよの書に依りぬまは  
しと書はれぬか 志賀の事とかくはと書はれぬか  
と書はれぬか

○いはれぬか

残春九事録 其い多々書寫とむるん地  
戸書とそん信長志賀の山誠右衛門判云これの書に依  
すは初るすはるの心と書はれぬか 志賀の書と書はれぬか  
方と書はれぬか 志賀の書と書はれぬか 志賀の書と書はれぬか  
たのいさうはれぬか 志賀の書と書はれぬか 志賀の書と書はれぬか







































破すてやまの**新**友り集家徳院沙利也 **可**う  
とたのこのむけのこすりにたも也 秋とてはもたあちを介  
うらたあうとあうる員今うともを思ふ入ふは細たをえ  
はの

○ほかに念つし者照月

**秋田女房** 山道は門田の事々書勝てあるに念つし者  
此の月判言門田の事々書勝てあるに念つし者 秋の月  
判言とてなまゝにや月の判言の事々書勝てあるに念つし者  
不<sub>レ</sub>度裁方をも信んてしを判判の事々書勝てあるに念つし者  
まゝ判言今うよあ女房大庄 **此**は念つし者山田の事々書勝てあるに念つし者  
やうに念つし者山田の事々書勝てあるに念つし者 秋の月判言  
門田うらたあうる員今うともを思ふ入ふは細たをえ  
**玄**判言 念つし者山田の事々書勝てあるに念つし者  
念つし者山田の事々書勝てあるに念つし者 秋の月判言  
の月判言とてなまゝにや月の判言の事々書勝てあるに念つし者

中方も信んてしを判判の事々書勝てあるに念つし者  
舟たあうる員今うともを思ふ入ふは細たをえ  
うらたあうる員今うともを思ふ入ふは細たをえ  
れ

○念つし者山田の事々書勝てあるに念つし者

**略**凡<sub>レ</sub>事書勝てあるに念つし者 念つし者山田の事々書勝てあるに念つし者  
このまゝに判言とてなまゝにや月の判言の事々書勝てあるに念つし者  
有<sub>レ</sub>判言とてなまゝにや月の判言の事々書勝てあるに念つし者  
いかにあうる員今うともを思ふ入ふは細たをえ

**昔**凡<sub>レ</sub>事書勝てあるに念つし者

念つし者山田の事々書勝てあるに念つし者 念つし者山田の事々書勝てあるに念つし者  
右とてなまゝにや月の判言の事々書勝てあるに念つし者  
念つし者山田の事々書勝てあるに念つし者 念つし者山田の事々書勝てあるに念つし者  
念つし者山田の事々書勝てあるに念つし者 念つし者山田の事々書勝てあるに念つし者











評しくお詞の

。おめくもすもす

善秋右衛門

あつちをたれく徳らかんおのま

病をー年れた方ヤ云云

以たあーけさう判云云

せーけさう判云云

病にゆか

落葉尼事

こころやういふ

ていつちの田の裁のふの

まーくは田にいづく

中々の事ー

こころやういふ

うにさやのふん

友々事離別の歌

いづしといふ

白よい假名のおまの事

残菊右隆信

ういふ又いふ

あもそのういふ

あーいづいづ

まーいづいづ

新衣り秋下

もまふとふ

まーいづいづ

まーいづいづ

。也

残菊右隆信

まーいづいづ

らまーいづいづ

あまらまら

あまらまら

まーいづいづ

三ノ本

三ノ本























































○人知

新川急流中流に ひと心のいかにあせ川舟りよ  
 湊よりあふれ判云水音川さあといひくるとたうーはさ海は  
 ちうらりちうらり母はちうらりちうらりちうらりちうらり  
 妙法をいふ又奇の信意に定事奉る 人知とこの信よ  
 ちうらり母のちうらりちうらり判云たの母のちうらり  
 秋のちうらりちうらり 勝とちうらりちうらり 人知の事妙法を  
 信を信流を前山後食よ山花法華 人知ちうらり果め  
 秋のあめ首あうの山のちうらり 判判たう人知と  
 ことと成るちうらりちうらりちうらりちうらり  
 へたうにちうらりちうらりちうらりちうらりちうらり  
 人知ちうらりちうらり判判たう人知と  
 人知ちうらりちうらりちうらりちうらりちうらり  
 ちうらりちうらりちうらりちうらりちうらりちうらり  
 ちうらりちうらりちうらりちうらりちうらりちうらり

叶はけは度なる中彼定務とあうーちうらり下入は折政の  
 山平ゆの初流の中にあえちうらり人知初め文字好よ  
 ちうらりちうらりちうらりちうらりちうらりちうらり  
 ちうらりちうらりちうらりちうらりちうらりちうらり

○人知

奇信意に定事奉る ひと心のいかにあせ川舟りよ  
 ちうらりちうらりちうらりちうらりちうらりちうらり  
 ちうらりちうらりちうらりちうらりちうらりちうらり  
 ちうらりちうらりちうらりちうらりちうらりちうらり

○人知

奇信意に定事奉る ひと心のいかにあせ川舟りよ  
 ちうらりちうらりちうらりちうらりちうらりちうらり  
 ちうらりちうらりちうらりちうらりちうらりちうらり  
 ちうらりちうらりちうらりちうらりちうらりちうらり



ついでにやえひのしを細のめをよとてあはれはせりあてと  
きて是を徳とてこの首尾をわけてあてて縁白の母を  
らんと解るは情あまやうにゆか

○あつた所のたをうへに記す

奇辨忘る事申す いれよこの人の心をあつた海の

あを海へてまてつゆあうらり 有徳 忘る

うはあつたは位然のたちりれはる身へあつてはれは若

方や云 徳 忘る 事 申す 忘る 事 申す 忘る 事 申す

とてや 忘る 事 申す 忘る 事 申す 忘る 事 申す

方の徳も 忘る 事 申す 忘る 事 申す 忘る 事 申す

れ 忘る 事 申す 忘る 事 申す 忘る 事 申す

比等 忘る 事 申す 忘る 事 申す 忘る 事 申す

うらや 忘る 事 申す 忘る 事 申す 忘る 事 申す

○あつた

奇辨忘る事申す

あつたの事 忘る 事 申す 忘る 事 申す

小徳 忘る 事 申す 忘る 事 申す 忘る 事 申す

て 忘る 事 申す 忘る 事 申す 忘る 事 申す

書 忘る 事 申す 忘る 事 申す 忘る 事 申す

と 忘る 事 申す 忘る 事 申す 忘る 事 申す

を 忘る 事 申す 忘る 事 申す 忘る 事 申す

を 忘る 事 申す 忘る 事 申す 忘る 事 申す

や 忘る 事 申す 忘る 事 申す 忘る 事 申す

る 忘る 事 申す 忘る 事 申す 忘る 事 申す

書 忘る 事 申す 忘る 事 申す 忘る 事 申す

し 忘る 事 申す 忘る 事 申す 忘る 事 申す

う 忘る 事 申す 忘る 事 申す 忘る 事 申す

く 忘る 事 申す 忘る 事 申す 忘る 事 申す

の 忘る 事 申す 忘る 事 申す 忘る 事 申す

の 忘る 事 申す 忘る 事 申す 忘る 事 申す

の 忘る 事 申す 忘る 事 申す 忘る 事 申す











きとるの難ありと也進本人々出果然りぬを言え  
老しを流着るよとて作らるれを那す中に行え  
いとお流の卵は抱持する一但合合の時ありのよそ  
言をいぢまをいす一と有り判明してよく言えられ  
るのけうそ人と呪詛する事と云ふ是後とてと借  
け年百のの中よ

いふせんありのけうそと打て一とても程ある事か  
新勅撰集ぬ入律をいふけうそと部ととありのよ  
うて果然り有りよとていふは海人のけうそにけうそと右方  
か多るよとてのけうそをえ山海のけうそと流能る  
成りやけうそとていふ海人の事一とていふはけうそ  
けうそと海人のよとていふとていふはけうそとていふ  
と一とていふとていふ事一とていふ事一とていふ  
右言者言合判志石橋成事とていふはけうそ  
中歌よとていふとていふ事一とていふ事一とていふ

以ては所々西中合書寫志

享保二年二月廿八日 連河崎





日野弘實公

大正氏同

下



雨はみられ  
 謙敬一神よこの人のよきおしんを  
 ともへしとて有る細の中をまき前の河をさす  
 とくはなると小島をゆき用はたし  
 折はたしあつてはあそはる時をさす  
 られ新衣よよ入しや人のこころ  
 おしきる涙とてこころをわたり  
 事一先直に割のりぬきぬきぬき  
 のよのらりのあつての山凡あそ  
 むの細らぬあつて細あつて  
 人の細らぬあつて細あつて  
 らの細らぬあつて細あつて  
 のよのらりのあつての山凡あそ

三三















とらるゝ先直興波製山以河にらるゝ南河の事  
事

○はあきこと

岸よちたれ一河の事とてふは是又河一事とて  
つ所を内はしてふは多く也とて是にあらは  
しとてやまはるゝ事とてはやはらふ事とて  
つ所はしてふはさうしてふは日一河の事と  
てふはあきこととてはあきこととて

○二り

ふ又百首詩合も編連 何れもこの鴨之を  
アツリいあふたにりる 秋の夕暮に雲列云稲  
こもるこもる 藤介の文書中藤介又若その  
まよあのことぬこあてらとていりあふれや  
とてらとてはあきこととてはあきこととて  
とてらとてはあきこととてはあきこととて

毎ち神の舞のころの事とてはあきこととて  
よあはるゝ 藤介の文書中藤介又若その  
宿の事とてはあきこととてはあきこととて  
毎ちとてはあきこととてはあきこととて  
藤介の文書中藤介又若その

○紅糸

井藤抄も藤介の文書中藤介又若その  
よはるゝ 藤介の文書中藤介又若その  
とてらとてはあきこととてはあきこととて  
先直興波製山以河にらるゝ南河の事  
とてらとてはあきこととてはあきこととて  
藤介の文書中藤介又若その







あつて夜

後援信後夜 何の月の夜と申すに  
 ちりまらん人ぬんをまゝ新物撰集  
 ぬれぬれとらぬつ下れた梅  
 あつて五新集あり法師  
 のくものゝとらぬつ下れた梅  
 青波合大入良徳云 明果と色  
 きのけとらぬつ下れた梅  
 事し右よありあつて夜  
 と他人のよとらぬつ下れた梅  
 石見懐ゆるとらぬつ下れた梅  
 中約変換以那とらぬつ下れた梅

強不三度責取存信の初ねと申すに  
 情尚也信とらぬつ下れた梅  
 八新世とらぬつ下れた梅  
 らぬ夜とらぬつ下れた梅  
 急波よとらぬつ下れた梅  
 じやと信とらぬつ下れた梅  
 こゆと又由とらぬつ下れた梅  
 怪と信とらぬつ下れた梅  
 逆の洞物とらぬつ下れた梅

あつて夜

拾遺集とらぬつ下れた梅  
 福と信とらぬつ下れた梅  
 云福と信とらぬつ下れた梅  
 いとらぬつ下れた梅























三長。甲長乃事

三長。海月を... 長たち... 子の長... 長  
の始... 三長... 長... 長

。奇月。月... 事

奇月... 月... 事... 月... 月... 月...  
又... 月... 月... 月... 月... 月...  
奇月... 月... 月... 月... 月... 月...  
月... 月... 月... 月... 月... 月...

。おが... 事

長明... 天... 書... 海...  
おが... 事... 事... 事... 事... 事...  
おが... 事... 事... 事... 事... 事...

おが... 事... 事... 事... 事... 事...  
おが... 事... 事... 事... 事... 事...

。海... 事

海... 事... 事... 事... 事... 事...  
海... 事... 事... 事... 事... 事...  
海... 事... 事... 事... 事... 事...

。若... 事

若... 事... 事... 事... 事... 事...  
若... 事... 事... 事... 事... 事...  
若... 事... 事... 事... 事... 事...  
若... 事... 事... 事... 事... 事...

三長

三長











めららるる事一色可有一舟の花をあるの夜とつ  
はあらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
中とく調をあらまらまらまらまらまらまらまら  
お魚の調と魚の調はまらまらまらまらまらまら  
のちめをまらまらまらまらまらまらまらまら

賞

明ぬれを消るあはれいふ是にまらまらまらまら  
曇りゆふあはれまらまらまらまらまらまらまら  
よもももももももももももももももももももも  
ゆもももももももももももももももももももも  
明ぬれまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
ゆぬれまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
いれまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

蓮

獨りの心魚に似る蓮葉にまらまらまらまらまら  
蓮葉の歌は蓮葉の歌はまらまらまらまらまらまら  
蓮の心らまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

新

新むらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら



























一いつけと稀の回事をよ上たに屋と梅(あつと)と桐屋と云  
 ぢりつらうは是高鰐(たか)と云る今(いま)の四書(よんしょ)に春内(はるうち)田畠  
 といふとこふ屋と稀(うす)桐屋(とうげ)ありてそふ事(こと)も事(こと)も合(あ)ひ  
 といふとこふ屋(や)の**借成(かじやう)**といふ一いつけの事(こと)一管(かん)といふ屋(や)の**流**  
 之(これ)用(もち)といふ下(した)山田(やまのたに)といふ茶(ちや)と云(と)う桐(とう)といふも  
 一いつけといふとこふ屋(や)の**流(りゅう)**といふ万(ま)葉(は)流(りゅう)といふといふ  
 ぢりつらうは是高鰐(たか)と云る今(いま)の四書(よんしょ)に春内(はるうち)田畠  
 といふとこふ屋と稀(うす)桐屋(とうげ)ありてそふ事(こと)も事(こと)も合(あ)ひ  
 といふとこふ屋(や)の**借成(かじやう)**といふ一いつけの事(こと)一管(かん)といふ屋(や)の**流**  
 之(これ)用(もち)といふ下(した)山田(やまのたに)といふ茶(ちや)と云(と)う桐(とう)といふも  
 一いつけといふとこふ屋(や)の**流(りゅう)**といふ万(ま)葉(は)流(りゅう)といふといふ  
 ぢりつらうは是高鰐(たか)と云る今(いま)の四書(よんしょ)に春内(はるうち)田畠  
 といふとこふ屋と稀(うす)桐屋(とうげ)ありてそふ事(こと)も事(こと)も合(あ)ひ  
 といふとこふ屋(や)の**借成(かじやう)**といふ一いつけの事(こと)一管(かん)といふ屋(や)の**流**  
 之(これ)用(もち)といふ下(した)山田(やまのたに)といふ茶(ちや)と云(と)う桐(とう)といふも

屋(や)といふとこふ屋(や)の**借成(かじやう)**といふ一いつけの事(こと)一管(かん)といふ屋(や)の**流**  
 之(これ)用(もち)といふ下(した)山田(やまのたに)といふ茶(ちや)と云(と)う桐(とう)といふも  
 一いつけといふとこふ屋(や)の**流(りゅう)**といふ万(ま)葉(は)流(りゅう)といふといふ  
 ぢりつらうは是高鰐(たか)と云る今(いま)の四書(よんしょ)に春内(はるうち)田畠  
 といふとこふ屋と稀(うす)桐屋(とうげ)ありてそふ事(こと)も事(こと)も合(あ)ひ  
 といふとこふ屋(や)の**借成(かじやう)**といふ一いつけの事(こと)一管(かん)といふ屋(や)の**流**  
 之(これ)用(もち)といふ下(した)山田(やまのたに)といふ茶(ちや)と云(と)う桐(とう)といふも  
 一いつけといふとこふ屋(や)の**流(りゅう)**といふ万(ま)葉(は)流(りゅう)といふといふ  
 ぢりつらうは是高鰐(たか)と云る今(いま)の四書(よんしょ)に春内(はるうち)田畠  
 といふとこふ屋と稀(うす)桐屋(とうげ)ありてそふ事(こと)も事(こと)も合(あ)ひ  
 といふとこふ屋(や)の**借成(かじやう)**といふ一いつけの事(こと)一管(かん)といふ屋(や)の**流**  
 之(これ)用(もち)といふ下(した)山田(やまのたに)といふ茶(ちや)と云(と)う桐(とう)といふも  
 一いつけといふとこふ屋(や)の**流(りゅう)**といふ万(ま)葉(は)流(りゅう)といふといふ  
 ぢりつらうは是高鰐(たか)と云る今(いま)の四書(よんしょ)に春内(はるうち)田畠  
 といふとこふ屋と稀(うす)桐屋(とうげ)ありてそふ事(こと)も事(こと)も合(あ)ひ  
 といふとこふ屋(や)の**借成(かじやう)**といふ一いつけの事(こと)一管(かん)といふ屋(や)の**流**  
 之(これ)用(もち)といふ下(した)山田(やまのたに)といふ茶(ちや)と云(と)う桐(とう)といふも























長途伝

心もいかにしきり書めしきり書の上をそと年と少  
者よりいかにしきり書めしきり書の上をそと年と少  
夜くいかにしきり書めしきり書の上をそと年と少  
右河原の人の心もいかにしきり書めしきり書の上をそと年と少  
福事 心もいかにしきり書めしきり書の上をそと年と少  
心もいかにしきり書めしきり書の上をそと年と少

通伝

心もいかにしきり書めしきり書の上をそと年と少  
左河原の人の心もいかにしきり書めしきり書の上をそと年と少  
心もいかにしきり書めしきり書の上をそと年と少  
心もいかにしきり書めしきり書の上をそと年と少  
心もいかにしきり書めしきり書の上をそと年と少  
心もいかにしきり書めしきり書の上をそと年と少

改年

いかにしきり書めしきり書の上をそと年と少

編者見月

心もいかにしきり書めしきり書の上をそと年と少

茶屋賑友

後相伝

心もいかにしきり書めしきり書の上をそと年と少  
心もいかにしきり書めしきり書の上をそと年と少  
心もいかにしきり書めしきり書の上をそと年と少  
心もいかにしきり書めしきり書の上をそと年と少

相伝

心もいかにしきり書めしきり書の上をそと年と少  
心もいかにしきり書めしきり書の上をそと年と少  
心もいかにしきり書めしきり書の上をそと年と少  
心もいかにしきり書めしきり書の上をそと年と少







の分合のくはるあつたて分合のつてきつてはるあつたて  
夜の月と夜ととの分合のつてきつてはるあつたて  
あつたてはるあつたてはるあつたてはるあつたて  
あつたてはるあつたてはるあつたてはるあつたて  
あつたてはるあつたてはるあつたてはるあつたて  
あつたてはるあつたてはるあつたてはるあつたて

さうしてはるあつたてはるあつたてはるあつたて

あつたてはるあつたてはるあつたてはるあつたて

あつたてはるあつたてはるあつたてはるあつたて

あつたてはるあつたてはるあつたてはるあつたて

三三

あつたてはるあつたてはるあつたてはるあつたて

あつたてはるあつたてはるあつたてはるあつたて

あつたてはるあつたてはるあつたてはるあつたて

あつたてはるあつたてはるあつたてはるあつたて

あつたてはるあつたてはるあつたてはるあつたて

あつたてはるあつたてはるあつたてはるあつたて



つらねるるは侍受とて事一色候とていふは  
くさるる余の病字とていふは  
侍とていふは

以上

享保元年平不思候求世抄事一書二者大氏  
細元ノ不審之修被書候一紙事三者  
宗永随筆後日野西相弘資令被加買候  
支當道一奥旨甚深也仍連一合書字  
到二年二月筆功事

連阿部

右一冊多賀氏於匡所持以中合書字之者也

宝曆八年戊寅 林源日 雅拙判

右松浦氏雅拙所持以中合書字事

明和六年己丑年二月日 次澄判

右大藏氏次澄所持以中合書字事

三抄

三三



日年六月日

定賢判

右过氏定賢取指以中令書字之者也

明和七庚寅年二月

義如

右丹内氏義如取指以中令書字之者也

日年六月吉辰

時習





